J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 143, p.33 ～ 34 (2019)

資　料
Miscellaneous

International Seminar and Congress of Indonesian Soil Science Society (ISCO-ISS 2019) 参加報告

足立泰久 [1]

Yasuhisa ADACHI[1]

1. はじめに

去る 8 月 5 日 – 7 日にインドネシアのバンドンで開催された，標記会議に参加する機会を得ました．恥ずかしながら，これまでインドネシアにおける土壌学分野の活動にあまり目を向けたことはありませんでしたが，今回はその内容に触れ，学ぶ貴重な機会となりました．

2. パジャジャラン大学の副指導

さて，パジャジャラン大学と言ってその名を知っている人はどの位いるでしょうか？ 少なくともこの話がくるまで，私にとって，ここから先の話の多くは未知の世界でした．聞いた話ではありますが，インドネシアには大小 3000 を超す大学があり，その内 122 が国公立大学，農学部を持っている大学は 80 以上，その内メジャーな 19 の大学に土壌学科があるそうです．パジャジャランはメジャーの中において名門の一つに数えられ，キャンパスはバンドン工科大学の新キャンパスに隣接し，小高い丘の高木の森の中に落ち着いたたたずまいを見せています．ご存知の方も多いとは思いますが，バンドンは赤道直下に位置するとは言え，高地にあるため避暑地のような気候で，古くから栄えた歴史のある街です．パジャジャラン大学の土壌学科は，土壌化学，土壌微生物，土壌物理，土壌保全の研究室で構成されています．筑波大学はパジャジャラン大学と交流協定を結び，作物育種の分野を中心に交流していましたが，昨年の 12 月に土壌学科の講師の方から，土壌の肥沃性に関する博士論文の指導教員になって欲しいと唐突にメールが入り，日本に留学していただけるのかと思って期待して返事をしたところ，そうではなく，講師の仕事を続けながらパジャジャラン大学の博士課程のプロジェクトを立ち上げ，筆者にその副指導担当（Co-promoter）を要請したいという用件で，交流にもいろいろなものがあるのだなと思って対応しておりました．当初，先方からは実用的な現場対応の課題を提示されましたが，「学位をとるのであれば，単純な問題で基本的な考え方を身に着けてからでないと，現実の複雑な問題にアプローチすることなどできない．」と筆者の研究のスタンスを説明したところ，「筑波大学から提示する基礎的な内容の課題で実施したい」と，合意することができ，博士論文作成を前提とした土壌コロイドの共同研究が開始されました．

3. ISCO-ISS 2019 について

（http://isco-iss.faperta.unpad.ac.id/index.php/isco/2019）

いろいろとやり取りをしている過程で，今回招待いただいた ISCO-ISS 2019 の話題がでてきました．最初 International Seminar という控えめな呼び方から，我々が時々大学主催で行う小さなシンポジウムのようなものを想像しましたが，話が進むにつれ，これがインドネシアの土壌科学会（Soil Science Society of Indonesia, HITI）が毎年開催している年会を 4 年に 1 回の割合で国際会議として行っている定例のものであること，パジャジャラン大学が今回の当番校であることなどが徐々に判明しました．会議は，開催のテーマ Land Resource Management and Agriculture Innovations Toward Sustainable Environment and Food Security のもと筆者のものも含め招待講演が 9 件（その過半数の 5 件が海外からの招待），全参加者はマレーシア，ブルネイ，タイなど 8 か国，350 名以上，発表数は口頭，ポスターあわせ 300 件以上の規模で 2 日間の日程で行われました．2 日目の朝，ホテルで手にした地元紙の朝刊の一面には大きな見出しで会議のことが報じられており，力の入れようも半端ではないと感じました．特徴としては，土壌学の概念が，筆者がこれまで抱いていたものよりも広く，日本でいえば灌漑排水，農村計画，土地利用計画，防災，生態学，ゴムやパームオイル産業

[1]Graduate School of Life and Environmental Science, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan. Corresponding author: 足立泰久, 筑波大学大学院生命科学研究科.

などのプランテーションの運営，開発と保全など産業界全体と取り込んだものも対象とされ，国土の計画や産業的なものも含め土が関わる総体が「Soil Science なのだ」と，とれたことです．因みに招待講演には，土地・空間計画省の高官の方によるものとパームオイルプランテーションの経営者によるものとが含まれ，前者では数十年スケールでのインドネシアの食糧増産計画，インフラ整備計画について，すなわち行政のプランニングが解説され，後者ではパームオイル産業の将来展望とサステナビリティに関する企業側の経営方針がアピールされました．因みにこの両者は学会運営の重要なスポンサーにも位置付けられていました．日本からは，小﨑 隆先生が国際土壌科学連合の会長として招かれ，冒頭での祝辞，招待講演，閉会式での世界の土壌分類図を描いたビーチボールの地球儀の披露（副賞として大学院生にプレゼント）など，大変積極的に活躍されておられました（Fig. 1）．

4. おわりに

以上のように立派な土壌の会議が開催される背景には，インドネシアは大小 13000 を超す島々に日本の 5 倍以上の国土を持ち，そこには大小 300 を超す民族の 2.3 億の人口が暮らし，生活を支え外貨を稼ぐ基幹産業に農業が位置づけられていることがあることは論を待たないでしょう．生物資源生産の豊かな熱帯雨林気候区に属することに加え，地質的にも石油や鉱物資源にも恵まれ，日本にも増して地震，火山活動が活発であることなどから，土壌も，火山灰土，ラテライト，ピートなど種類豊富で多様であり，サイエンスとしてもまたエンジニアリングとしてもインドネシアの Soil Science が沢山の問題に直面していることを目の当たりにし，土壌資源大国インドネシアを肌で知ることができたことが今回の成果になりました．また，HITI 会長の Budi Mulyanto 先生はじめ，インドネシアの方々は日本との交流に非常に積極的であったことを付記します．最後になりますが，今回の訪問の機会をいただきました，パジャジャラン大学土壌化学研究室 Oviyanti Mulyanti 先生，Benny Joy 教授にお礼申しあげます．



Fig. 1　閉会式の 1 コマ．閉会式では今回の学会に際して行われた各大学の学生による Soil Contest（土壌調査コンテスト）の優秀賞および優秀ポスター（計 6 件）が表彰された．トロフィーを持っている学生に囲まれて，右から大会の実行委員長（Anne Nurbatiy 先生），国際土壌科学連合会長（小﨑 隆先生），インドネシア土壌科学会会長（Budi Mulyanto 先生）．